

地域漁業学会

会 報

【発行】

地域漁業学会 事務局

〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20

鹿児島大学水産学部内

chiikioffice@gmail.com

Tel&Fax 099-286-4280

<http://jrfs.org/>

No.94

2014年3月

目 次

1. 会長就任のご挨拶：学知の継承に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・田和 正孝
2. 第55回大会印象記
 - 1) アフリカの漁撈研究の兆し・・・・・・・・・・・・・・・・中村 亮
 - 2) 地域漁業学会第55回大会に参加して・・・・・・・・田坂 行男
2. 第55回総会報告・・・・・・・・・・・・・・・・学会事務局
 - 1) 54期決算報告
 - 2) 55期予算計画
 - 3) 新理事および委員会構成
 - 4) 学会賞受賞者
 - 5) 次期大会の開催地等について
3. 事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・学会事務局
 - 1) 住所変更等の連絡について
 - 1) 事務局体制の変更について

1. 会長就任のご挨拶

—学知の継承に向けて—

関西学院大学 田和 正孝

ここ数年、学会への参加がままならず、最新の情報を会員の皆様と共有せぬまま会長に選任いただきましたこと、申し訳なく、また身の引き締まる思いで受け止めております。皆様のお力をお借りしながら、仕事を全うできるよう努力をいたしますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

思えば、前身の西日本漁業経済学会から地域漁業学会へと名称変更してからすでに 20 年以上が経過しました。「地域性」「国際性」「学際性」という学会の理念が定着し、それが大会での発表、各種のシンポジウムや交流集会、部会活動に引き継がれてきていることは周知の事実です。鹿児島大学にて開催された第 55 回大会を振り返ってみても、枕崎の鰹節産業の過去・現在・未来を取りあげたシンポジウム、漁業経済学はもとより、地域研究、人類学、地理学など専門が異なる研究者が発展途上国から先進国まで様々なフィールドを対象に調査・研究した個別報告から、本学会の理念を大いに感じることができました。

私の第一の目標は、こうした理念に基づいて本学会がこれまで築きあげてきた財産を維持し、これらをさらに蓄えてゆく道を探ることです。1976 年に本学会に入会した自身にとっては、それなりに学会の歴史を見通せるという自負もあります。その中で大切なことのひとつが、スムーズな世代交代や学知の継承であると考えます。地域という名称を戴くことによって、学際性は確かに大きな広がりを持ちました。若手の研究者にも広い門戸が開かれました。しかし、こうした若手研究者が、学問の壁を越えて情報を交換し、ともに調査地に赴いて議論するといった活動を果たしてなし得てきたでしょうか。きわめて大きな成果を生んだ事例が数多くあります。他方で、若手研究者が本学会を研究発表の場として一時的に利用するだけに終わったり、彼／彼女たちの学会活動が数年間しか続かなかつたりしたことを何度も見てきました。この責任を本人たちにだけに帰するわけにはいきません。私たちは、いかにして後継の人たちに研究の場を与えてゆけばよいのか、真剣に考える時期であるとの認識にたって、会長の仕事をスタートしたいと考えます。

具体的には、様々なバックグラウンドを持ちながら集った若手研究者に、本学会に対する期待を語ってもらう集会や、シニアの研究者が自らの研究歴や自分史を語るシンポジウムも催したいと考えています。このような計画に対して皆様から建設的なご意見をお寄せいただければ幸いです。

学会運営につきましては、会員の皆様はもとより事務局の方々のお力なくしては成り立ちません。どうかよろしくご協力くださいますよう重ねてお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

2. 第 55 回大会印象記

1) アフリカの漁撈研究の兆し

総合地球環境学研究所 中村 亮

2013 年 10 月に鹿児島大学水産学部で開催された地域漁業学会の第 55 回大会に参加させていただいた。私は文化人類学を専門とし、東アフリカ・スワヒリ海岸と紅海沿岸の漁撈文化について調査研究している。しかしこれまで、漁業研究の専門家が集まる学会で発表した経験はなかった。おそろおそろの門戸をたたいたわけであるが、振り返ってみると今回の学会参加から得たものは多かった。

地域漁業学会へは初めての参加ということもあり、その特色を知るために、学会のウェブサイトに掲載されている「過去の学会誌の論文目録」で、どのような研究があるのかを調べてみた。2013 年までに 55 巻 1・2 号まで刊行されており、論文は 848 点にのぼる。論文題目から海外の事例を扱ったものを数えると約 150 点（全体の二割ほど）あり、国際色豊かな学会であることが分かった。しかし、海外の事例の中心はアジア沿岸諸国であり、アフリカについては、西アフリカ 2、セネガル 2、ナミビア 1、モロッコ 1、マラウイ 1 の 7 点と少ない。

今回はスーダン紅海沿岸の資源利用について報告させていただいたが、学会ではなじみの薄いアフリカの事例がどのように受け入れられるか少し不安でもあった。しかしふたを開けてみると、27 日の個別報告会は 19 発表のうち 8 発表がアフリカも含めた海外の事例であった。私は B 会場に詰めていたが、詳細な現地調査に基づいた世界各国の漁業の事例を一度に勉強することができたのはありがたかった。特に、漁師がつけた「漁業ノート」を扱った報告は興味深かった。というのも、私もタンザニアの干物商人がつけたノートをもっているが、これをどのように分析しようか困っていたところ、良いヒントをもらうことができたからである。

B 会場ではアフリカの事例報告が三件あった。現在、アフリカの漁業／漁撈について研究している日本人研究者は数えるほどしかおらず、一つの会場でアフリカの事例報告が三つも行われるというのは珍しいことである。さらに B 会場には、西アフリカの漁業研究者の北窓時男さんもいらっしやう。後日、今回の学会で発表した京都大学の稲井啓之さん（チャド、カメルーン）、藤本麻里子さん（タンザニア）と私の三人で少人数ながらも「アフリカ漁業研究会」を立ち上げた。ここに北窓さんにも加わっていただき、現在、アフリカの漁業研究をまとめた本の出版を計画している。

地域漁業学会が縁で、アフリカの漁業研究が盛り上がりつつある。このような出会いの場を与えてくれた地域漁業学会には本当に感謝している。また、26日のシンポジウムでふれられたカツオの食文化についても楽しむことができた。居酒屋で出された「カツオの腹皮」の炙り酢あえは絶品であった。新しい情報を知り、研究仲間も増え、食も堪能することができた第55回地域漁業学会は、大変印象深く有意義なものであった。

2) 地域漁業学会第55回大会に参加して

中央水産研究所 田坂 行男

台風の九州接近で開催が危ぶまれた鹿児島大会であったが、青空の下での開催となった。今年の個人報告は19本であったが、例年になく様々な分野の方々の参加があり、大変興味深い学会となった。また、初日に開催されたシンポジウム「かつお節産業の過去・現在・未来—現代的状況と今後の展望・枕崎地区を中心に—」には枕崎から多くの業界関係者の参加もあり、地域としての関心の高さが感じられた。

枕崎で生産されるかつお節は地域団体商標「枕崎鰹節」として登録されており、なかでも本枯節は(財)食品産業支援センターから「本場の本物」の認定を受けている一品である。また、昨年12月には、日本の「和食」がユネスコ世界無形文化遺産として登録されたが、「和食」は「だし」に代表されるうまみが味の土台をつくっている訳であるから、かつお節は昆布とともに、改めて注目されてしかるべき存在であろう。

しかし、現実には、家庭においてかつお節を削る光景は遠い昔のことになり、「だし」さえ顆粒やつゆ状でという簡便指向派が主流になっている。また、簡便化、個食化といった言葉で代表される近年の国内食事情において「和食」自体が劣勢に立たされている。栄養価や健康を考えると和食が良いと考える国民が増えつつあるとはいえ、日常生活においては相反する行動を取ることが往々に見られる。それを食品産業の商品販売戦略やCVMを含む量販小売店の販売活動が後押しし、現在の食場面を形成していることは改めて言うまでもない。かつお節産地に出掛ける機会が増えた私も、産地が変わっていく様子を目のあたりにしてきただけに、今回のシンポジウムでは、伝統的商品を作り続けてきた水産加工産地のこれからの姿を考えたいとの思いで参加させてもらった。

シンポジウムでは、まず「和食のだし」の歴史と商品価値、諸機能についての報告があり、実際に参加者が3種類の「だし」を口にするすることで、かつお節が持つ商品価値の高さを確認することから始まった。一方、食品産業のニーズ変化に対応して商品形態を変化させ、設備投資が進んでいる現状や商品取引構造の変化、新規産業の創出される背景、労働事情の変化などに関する事例報告が行われ、かつお節産地の現代的状況と問題点が浮き彫りにされた。伝統的商品を作り続けてきた水産加工産地のこれからのをどのように考えていくべきかという課題については今後の議論に負うところが大きいですが、今回のシンポジウムでは、豊富な情報によって参加者が共通の認識に立つことが出来たといえよう。

ここでは、シンポジウムに参加した1人として、またこれからの議論に参加していくために、自分なりにシンポジウムで考えたことを思いつきも含めて整理をしておきたい。

①枕崎のかつお節産業を「かつお節クラスター」として捉え、全体の底上げを図っていくことの必要性：今回のシンポジウムでは報告がなかったが、近年の枕崎ではかつお節原料が慢性的な不足状態にあることに加えて、枕崎船籍の遠洋かつお一本釣り漁船5隻のうち2隻が25年度で廃業となり、原料の安定供給をいかに図るかが地域としての喫緊の課題という。安定的に鰹を水揚げしてもらうためには需要量をまとめる必要があり、地域内の鰹関連産業が一体となって取り組むことが重要であり、クラスター視点に立った産業ビジョンの立案も視野に入れていく必要がある。

②これからのかつお節産業の振興対策は、「和食復権」のフレームの中に位置付けることの必要性：和食の良さについては既に国政レベルのものとなっているが、かつお節産業の振興対策についてもその中に明確に位置付け、一産地の運動に終わらせないことが必要。

和食の良さを海外に発信していくことは、和食の土台をつくっている「うま味」を海外に発信していくことでもあり、国を挙げての運動の中にかつお節を位置付けることは重要である。

③厨房・台所に飛び込んだ販売マーケティング活動を強化することの必要性：「かつお節クラスター」を構成する企業のうち、簡便指向に対応して行動している企業は、ユーザーである食品企業からの要請に対応していける企業力をつけることが重要であることから、個別企業の対応となる。一方、その他の企業（特に本枯節）については個別企業の対応だけでは不十分であることから、業界全体が一体となって販売マーケティングを展開するなどの取り組みが不可欠である。マーケティング活動にあたっては、インターネットを使つての拡販や既存の節問屋と連携しての拡販などが想定されようが、その際に重要なのは、

スローフード活動やこだわり商品に価値を見い出している消費者群の存在に着目し、担当制を敷いてのターゲット・マーケティングを実施していくことである。厨房・台所に飛び込み、個別ユーザーの需要特性に応じたマーケティングを実施し、日々かつお節に対する需要を深めるための支援（情報提供を含む）を行っていくことが必要である。また、和食のヘビーユーザーに成長していただくための消費者育成プログラムを作成し、業界一体となってユーザーに接していく活動も今後求められよう。

3. 第55回総会報告

1) 第54期決算報告

1.一般会計の部							
(1)収入の部				(2)支出の部			
費目	予算額	決算額	増減(決算-予算)	費目	予算額	決算額	増減(決算-予算)
前期繰越金	3,061,322	3,061,322	0	本部事務費	190,000	65,515	(124,485)
会費収入	1,850,000	1,082,000	(768,000)	通信・郵送費	130,000	64,740	(65,260)
一般会費	1,500,000	1,000,000	(500,000)	労賃・謝金	50,000	0	(50,000)
学生会費	200,000	72,000	(128,000)	消耗品費	10,000	775	(9,225)
団体会費	150,000	10,000	(140,000)	学会誌作成費	2,020,000	494,025	(1,525,975)
大会参加費	70,000	0	(70,000)	印刷費	2,000,000	494,025	(1,505,975)
抜刷自己負担金	50,000	0	(50,000)	労賃・謝金	20,000	0	(20,000)
学会誌販売収入	250,000	148,000	(102,000)	消耗品費	0	0	0
投稿料収入	300,000	120,000	(180,000)	名簿・会報作成費	0	0	0
寄付金	0	100,000	100,000	理事会運営費	0	0	0
雑収入	1,000	3,260	2,260	部会費(10000*7部会)	0	0	0
著作権		79,319	79,319	委員会費(10000*5委員会)	0	0	0
合計	5,582,322	4,593,901	(988,421)	学会賞副賞費	100,000	122,860	22,860
(寄付金は近藤信義会員からのものである。)				大会準備費	200,000	192,715	(7,285)
(3)財産目録				(内要旨集印)	100,000	92,715	(7,285)
種別	残高			学術会議等団体活動費			
銀行預金	914,433			予備費	10,000		(10,000)
郵便振替	2,206,250			小計	2,520,000	875,115	(1,644,885)
現金	5,103			損金		593,000	
計	3,125,786			次期繰越金	3,062,322	3,125,786	63,464
				合計	5,582,322	4,593,901	(988,421)

2) 第55期予算計画

1.一般会計の部							
(1)収入の部				(2)支出の部			
費目	55期予算額	54期予算額	増減(54期-53期)	費目	55期予算額	54期予算額	増減(55期-54期)
前期繰越金	3,125,786	3,061,322	64,464	本部事務費	190,000	190,000	0
会費収入	1,660,000	1,850,000	(190,000)	通信・郵送費	130,000	130,000	0
一般会費	1,500,000	1,500,000	0	労賃・謝金	50,000	50,000	0
学生会費	150,000	200,000	(50,000)	消耗品費	10,000	10,000	0
団体会費	10,000	150,000	(140,000)	学会誌作成費	2,020,000	2,020,000	0
大会参加費	70,000	70,000	0	印刷費	2,000,000	2,000,000	0
抜刷自己負担金	50,000	50,000	0	労賃・謝金	20,000	20,000	0
学会誌販売収入	250,000	250,000	0	消耗品費	0	0	0
投稿料収入	300,000	300,000	0	名簿・会報作成費	0	0	0
寄付金	0	0	0	理事会運営費	0	0	0
雑収入	1,000	1,000	0	部会費(10,000*8部会)	0	0	0
合計	5,456,786	5,582,322	(125,536)	委員会費(10,000*7委員会)	0	0	0
				学会賞副賞費	10,000	100,000	(90,000)
				大会準備費	200,000	200,000	0
				(内要旨集印)	100,000	100,000	0
				予備費	10,000	10,000	0
				小計	2,430,000	2,520,000	(90,000)
							0
				次期繰越金	3,026,786	3,062,322	(35,536)
				合計	5,456,786	5,582,322	(125,536)

3) 学会賞受賞者

2013年の地域漁業学会（鹿児島大会）において、以下のとおり、中楯賞、柿本賞、および学会賞の受賞が決まりました。

〈地域漁業学会賞〉

東村 玲子 会員

『ズワイガニの漁業管理と世界市場』成山堂書店、2013

〈地域漁業学会功労賞（柿本賞）〉

小野 征一郎 会員

〈地域漁業学会奨励賞（中楯賞）〉

玉置 泰司 会員

「水産業・漁村の多面的機能と政策形成の特徴に関する一連の研究」

鹿熊 信一郎 会員

「沿岸域における水産資源管理に関する研究」

4) 新理事および委員会構成

(1) 新理事構成

会 長：田和 正孝

副会長：波積 真理

部 会 名	理 事
九州・沖縄（5名） 推薦理事5名 合計10名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 亀田 和彦（長崎大学） ・ 佐々木 貴文（鹿児島大学） ・ 佐野 雅昭（鹿児島大学） ・ 鹿熊信一郎（沖縄県庁） ◎波積 真理（熊本学園大学） ・ 佐久間美明（鹿児島大学） ・ 鳥居 享司（鹿児島大学） ・ 久賀みず保（鹿児島大学） ・ 日高 健（近畿大学） ・ 中村 周作（宮崎大学）
中国・四国（4名） 推薦理事3名 合計7名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 若林 良和（愛媛大学） ◎板倉 信明（水産大学校） ・ 甫喜本 憲（水産大学校） ・ 山尾 政博（広島大学） ・ 竹ノ内徳人（愛媛大学） ・ 濱田 英嗣（下関市立大学） ・ 伊藤 康宏（島根大学）
近 畿（4名） 推薦理事1名 合計5名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田和 正孝（関西学院大学） ・ 前潟 光弘（近畿大学） ・ 榎 彰徳（大阪いずみ市民生活協同組合） ◎増崎 勝敏（大阪府立旭高等学校） ・ 河原 典史（立命館大学）
東海・北陸（2名） 推薦理事3名 合計5名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 加藤 辰夫（福井県立大学） ・ 磯部 作（日本福祉大学） ◎常 清秀（三重大学） ・ 林 紀代美（金沢大学） ・ 東村 玲子（福井県立大学）
関 東（7名） 推薦理事1名 合計8名	<ul style="list-style-type: none"> ◎玉置 泰司（中央水産研究所） ・ 宮田 勉（中央水産研究所） ・ 牧野 光琢（中央水産研究所） ・ 田坂 行男（中央水産研究所） ・ 橋村 修（東京学芸大学） ・ 工藤 貴史（東京海洋大学） ・ 末永 芳美（東京海洋大学） ・ 山下 東子（大東文化大学）
東北・北海道（2名） 合計2名	<ul style="list-style-type: none"> ◎宮澤 晴彦（北海道大学） ・ 古林 英一（北海学園大学）
韓 国（2名） 合計2名	<ul style="list-style-type: none"> ◎金 炳浩（釜慶大学校） ・ 姜 練實（麗水水産大学校）

会計監事：・米田 寛 ・田中 史朗（鹿児島県立短期大学）

注：部会名の後の人数は、部会員数を反映した理事数。その下の推薦理事人数は会長推薦枠の人数。合計は両者をあわせた部会理事の人数。◎は部会長を示す。

(2) 委員会構成 2013年10月～

①学会誌編集委員会

- ・久賀みず保 (鹿児島大学)
- ・金 炳浩 (釜慶大学校)
- ◎佐野 雅昭 (鹿児島大学)
- ・佐々木 貴文 (鹿児島大学)
- ・田坂 行男 (中央水産研究所)
- ・鳥居 享司 (鹿児島大学)
- ・林 紀代美 (金沢大学)

②国際交流委員会

- ・玉置 泰司 (中央水産研究所)
- ・波積 真理 (熊本学園大学)
- ◎亀田 和彦 (長崎大学)
- ・牧野 光琢 (中央水産研究所)
- ・常 清秀 (三重大学)
- ・姜 鍊實 (全南大学校)
- ・東村 玲子 (福井県立大学)
- ・竹ノ内徳人 (愛媛大学)

③研究企画委員

選考中

④学会賞選考委員会

- ◎磯部 作 (日本福祉大学) #
- ・伊藤 康宏 (島根大学) #
- ・日高 健 (近畿大学) *
- ・佐野 雅昭 (鹿児島大学) *
- ・加藤 辰夫 (福井県立大学) #
- ・山下 東子 (大東文化大学) #
- ・田坂 行男 (中央水産研究所) *

⑤震災対応特別委員会

- ◎山尾 政博 (広島大学)
- ・若林 良和 (愛媛大学)
- ・林 紀代美 (金沢大学)
- ・山下 東子 (大東文化大学)
- 磯部 作 (日本福祉大学)

注：学会賞選考委員会の*は2015年9月、#は2014年9月任期を示す。各委員会の◎印は委員長、○印は副委員長を表す。研究企画委員の任期は1年とする。

5) 次期大会の開催地等について

次期第56回大会は、東海・北陸部会のお世話により、三重大学で開催されることになりました。

3. 事務局からのお知らせ

1) 住所変更等の連絡について

住所や連絡先を変更した会員はお早めに事務局までメール、ファックス、郵便等でお知らせください。特に春は転勤や卒業・修了がきっかけで連絡が取れない会員が増加する傾向にあります。学生会員の指導教員の方も、お手数ですがご指導をお願いいたします。

2) 事務局体制の変更について

学会本部事務局の会計担当を佐野から鳥居に、会員担当を鳥居から佐々木に変更いたします。今後ともよろしくをお願いいたします。

地域漁業学会 <http://jrfs.org/>
本部事務局 〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20
鹿児島大学水産学部内 Tel&Fax 099-286-4280
担当 佐久間美明 chiikioffice@gmail.com
郵便振替：01750-0-83886 銀行振込：鹿児島銀行 鴨池支店 普通 3354886